

信濃国・長野県・小布施におけるリンゴとナシの栽培

——高井鴻山は小布施のリンゴ・ナシを描いている——

市川正夫

はじめに

長野県は、リンゴやナシをはじめとするあらゆる落葉果樹が栽培されている。しかも量的にも多いため「落葉果樹王国」とも言われる。長野県は気候や土壌等においても果樹栽培に適しており、明治期から長野県の農民が積極的に果樹を導入したことも挙げられる。

リンゴと言えば国内では青森県と長野県が二大産地となっている。なかでも長野県は北信地方が主で、かつて北斎館のある小布施はリンゴが農産物の中心でもあった。現在国内のりんごの主要品種は、ふじやつがるで西洋リンゴに分類される。西洋リンゴの栽培は、明治期に入り始められたが、それ以前は和リンゴと呼ばれる古代中国から伝来したリンゴを、栽培していた。

ナシは大きくは三分類される。和ナシ（日本ナシ）は国内では中部地方以西で栽培され、国外では中国中央部、朝鮮半島南部に分布している。中国ナシは華北地方の三省を中心とした長江（揚子江）沿岸で栽培されている。西洋ナシ（洋ナシ）の原産地は、ヨーロッパ中部と地中海沿岸で、フランスで改良が進められた。

江戸時代末、葛飾北斎が招いた信濃国小布施の豪商高井鴻山は和リンゴ

や和ナシのスケッチを残しており、北斎は小布施でリンゴやナシを見たと思われる。

本稿では信濃国における和リンゴ・和ナシと、明治から昭和期の長野県や小布施における西洋リンゴ・和ナシの栽培、また小布施の豪商である高井鴻山とリンゴ・ナシとの関係についても述べてみたい。

一 信濃国における和リンゴ・和ナシ

長野県のリンゴとして最も古いと思われるのは、南佐久郡川上村に自生する野生リンゴである。川上村は長野県の最東端にあり、千曲川の源流のある村でもある。その川上村でも埼玉県境にある梓山地区から新三国峠を経て、埼玉県秩父郡大滝村に至る中津川林道に野生のリンゴが点在している。川上村ではこの和リンゴを「リンキ」を呼び、標高が一〇〇〇〜一五〇〇メートルの高冷地で五月上旬には花を咲かせる。また江戸時代、川上村がリンゴの産地であり、御所平や大深山などを中心に現在の村全体で栽培されてきて、出荷先は甲府まで運ばれていた。

江戸時代後半、小野蘭山作の『本草綱目啓蒙』（一八〇三年）には、リンゴの産地として加（加賀、石川県）、奥羽（東北地方）、信（信濃）を挙げている。これは古来中国から伝来したクラブアップルと呼ばれる小リンゴ

のことで、一般的には和リンゴである。

明治初期に発刊された『長野県町村誌』には、各町村の戸長からその地域の物産とその生産量が書かれている。これには品目は決められていないため、たとえ生産していたとしても記載されていないことがある。また、この書籍は明治期における品目や生産量の記載ではなく、江戸時代末期の様子を表していると考えられる。ここではリンゴについて「林檎」と表記がついていれば間違いはないが、「檎」という字があればリンゴと判断した。そして上水内郡吉田村（現長野市）、上高井郡北岡村（現小布施町）、南佐久郡御所平村（現川上村）、東筑摩郡筑摩村（現松本市）などで栽培されていた。しかし用途は自家製、または地元消費、近くの都市に出荷されていた。

和ナシの日本における栽培記録は、『日本書紀』（七二〇年）持統天皇の章で「ナシその他の草木を植えて五穀の助けにすることを勧めた」という記述があることから、八世紀にはナシが栽培していたことになる。

信濃におけるナシの記述として、『三代実録』（九〇八年）に光孝天皇仁和二年（八八七年）に貢納品として「信濃の国からナシ・大ナツメ・呉桃子^{くわもみ}を献上した」とあり、これが初出である。さらに、『延喜式』（九〇五〜九二八年）の諸国献進菓子中に「甲斐国から青梨子^{あおなし}を献じた」という記録がある。

『甲斐国史』（八〇五〜一八一三年）には「延喜式以来有名になった青梨子は当州各地に栽培され、勝沼産が最も優秀にして、本種は甲州地方に多く肉質柔軟多汁で食用価値のあるも果実小形なり」とある。これは日本の野生種の一つであるという青ナシではないかという説もある。古い書物にはナシは菓王とも言われ、奈良時代から鎌倉・室町にかけて、地名・分布の観点からも重要視されていた。

江戸時代のナシ栽培については、『梨栄造育秘鑑』（二七八二年）に天明

二年（一七八二）越後国蒲原郡萱場村の阿部源太夫が著者でナシ栽培しており、そこには早熟種一九種、中生種・晩生種五六種が栽培方法とともに記述してある。ナシの特産地として、享保年間（一七一六〜一七三五年）に越後国西鎌原郡、元暦年間（一一八四〜一一八五年）に山科国綴喜郡^{つぎ}宝暦年間（一七五二〜一七六四年）上野国勢多郡、享保年間（一七一六〜一七三五年）は武蔵国橘樹郡等があった。江戸期は国内でも本州中央部で栽培されていたことがわかる。

信濃では和ナシの栽培記録はないが、隣国の越後国・上野国で栽培されていたため、信濃でもつくられていたと考えられる。また『長野県果樹発達史』には信濃において、返目村・桐原村・妻科村・綿内村・寺尾村（現長野市）、山田村（現上田市）、諏訪湖周辺の村、西高遠村（現伊那市）、飯田町（現飯田市）、押切村・羽場村（現小布施町）にあったとある。出荷というよりも自家製のものであると思われる。さらに現存している樹齢から、江戸初期から中期にかけてのものである。

二 明治・大正・昭和期の長野県における西洋リンゴ・和ナシ

(一) 初期の西洋リンゴ栽培

現在長野県下で栽培されているリンゴは、明治政府による殖産興業の一環である。これは明治六年（一八七三）欧米使節団として帰国した大久保利通が内務卿に就任して、現在の日本の農業が欧米などの先進国と比較して遅れていると感じた。そこで大久保は国内の畜産・林業・果樹栽培に国費を投じることを提案した。

それ以前の明治四年（一八七一）「米国より苗木・器具購入」という、